

近世浄土真宗寺院本堂の研究 (そのⅣ)

蓮成寺本堂と正福寺本堂

岡 野 清

STUDY OF MAIN HALL IN THE JYODOSHIN SECT IN EDO PERIOD (PART Ⅳ)

Kiyoshi OKANO

蓮成寺本堂 愛知県碧南市鷺林町

愛知県下でも発見が稀な道場型式の原型から発展して寺院本堂の形態を成している寺院として、碧南市鷺塚に蓮成寺(水野寺, 真宗大谷派本堂)について原形を追求し、創建当時の簡素な道場建築の実状を復原してみた。

建立と沿革

建物に関する文献はなく由緒も不明であるが、現本堂の鬼瓦に元禄の銘がある。瓦銘と建立年代とは関係があると考えてよいが、建立のとき萱や檜皮で葺いておいて、その後瓦に葺き替えるとか、屋根修理の際鬼瓦を新調すると瓦より古い建立になるが、この堂の場合は絵様の様式と相関してみてもそれ程ずれは無く、建物が早く建てられたとしても、17世紀後半頃とみてほぼ間違いなさそうである。

建立当時は規模も小さなものであったが、漸時増築されたものである(図1, 2)。

構造規模

正面見付8間、奥行8間半で、中型の本堂の態を成している。南1間巾通りは広縁で、柱間を解放する。外陣外廻りは正面に近代の舞良戸引違いの内に硝子障子引違いの2重建具で、中央間3間は戸4、硝子障子4、その両脇は1間半で戸2、硝子障子2、更にその両外は1間で同じ戸締りである。中央間は3間の大梁で担い、中央に束を立てて桁を受ける。その両側正面は長押付。小壁は全て漆喰真壁とする(写真12)。

向拝柱は2間スパンで几帳面取樺材角柱、高い切石礎石に礎盤をおき、粽はなく、木階2級(写真2)。柱間虹梁は、袖切、眉、渦、若葉つき欠眉があり、様式からして江戸中期に間違いのない(写真1)。両端に象鼻の木鼻を出して連三斗斗拱を載せ(写真1)、身舎と差肘木で受けた海老虹梁で繋いでいる。軒は半繋1軒、本瓦葺

(写真12)。

外陣外廻り側面は中敷居に雨戸引違い、内法長押を通して、小壁は漆喰真壁。外陣は奥行4間で、奥1間を矢来内とし、西端は外陣見付より半間外に出て奥へ廻って飛檐間となる(図1)。外陣を前面見付の柱通り桁行に5分し、柱列で区切り中央間両側は柱に虹梁を差込んで上を小壁とし、中央虹梁上には束を立て、奥の虹梁は一段高く両端下端を皿斗付木鼻で受け、木鼻と同高に手前虹梁がとりつく。木鼻とも絵様付きで、元禄以前の様式と言える(写真5)。更に1間半外の柱列は1間毎に柱を立て敷鴨居に内法長押、漆喰小壁をつける。天井は中央間をやや高く梁行に棹を通した棹縁天井とする(写真4)。

内陣は見付3間、奥行3間で、脇仏壇中間から後堂へ通ずる。奥から1間手前中央に1間巾の来迎壁を設け、



写真1 向拝正面中央

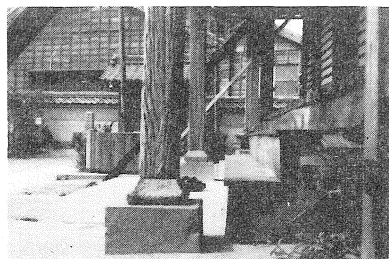


写真2 向拝下

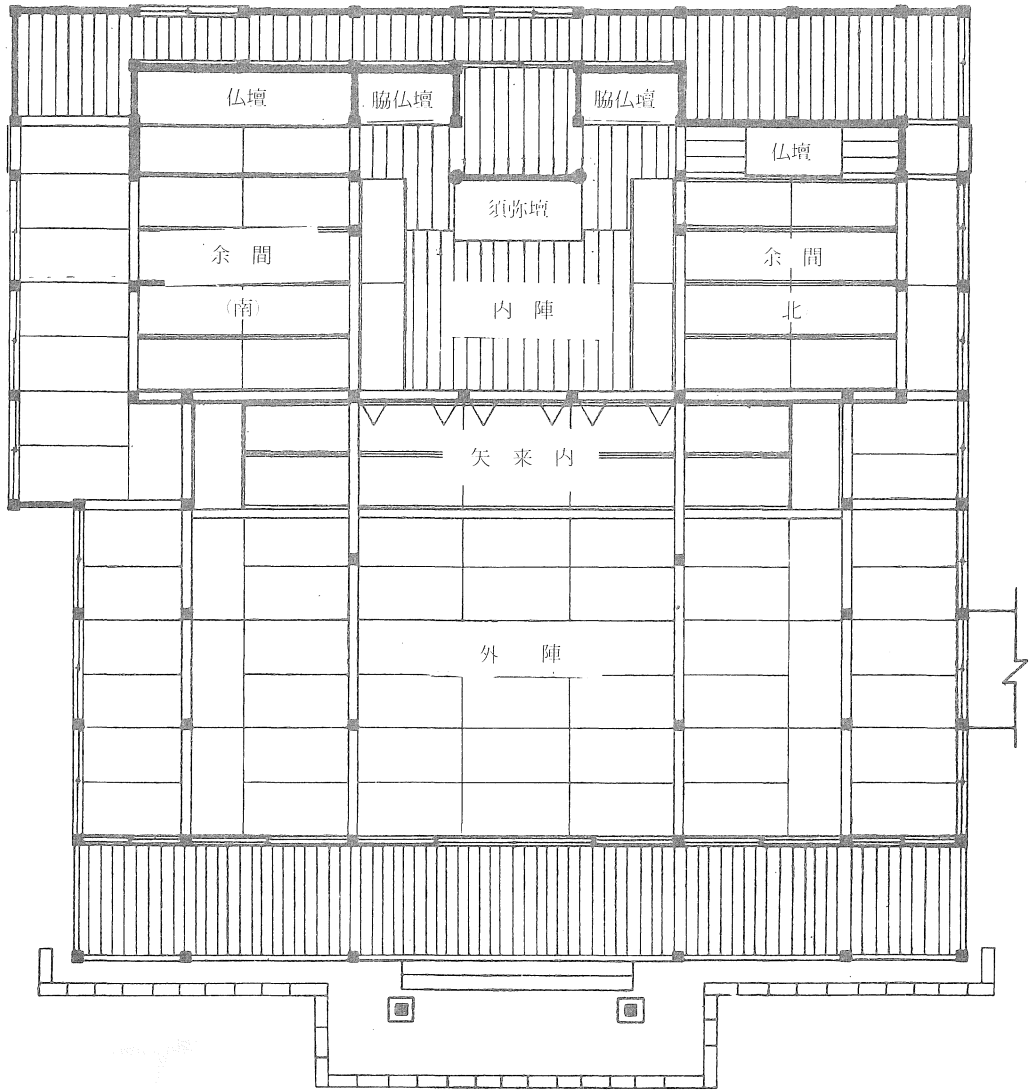


図1 蓮成寺本堂現状平面図

来迎柱は八角柱(写真7)、前に唐様須弥壇をおき空殿を載せ、天井は格天井とする(図1、写真6)。

南余間は見付2間、奥行3間で奥半間は仏壇、北余間は奥行2間半で奥半間を仏壇とし、両余間とも内陣より

1段下り畳敷き、棹縁天井とする(図1)。両余間及び内陣と矢来内の境には内陣、矢来内境は1間毎の柱に巻障子を設け、内法長押の上には高肉彫欄間を嵌め、その上には木鼻付三斗斗拱を前面から嵌め込んでつけ、中備

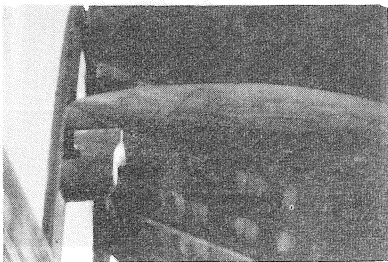


写真3 向拜繫虹梁

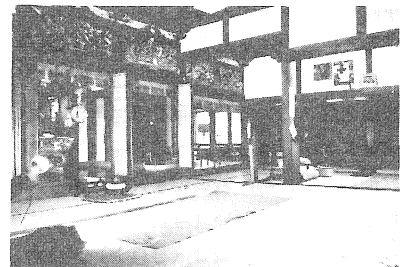


写真4 外陣



写真5 外陣中央柱及び梁行虹梁の絵様

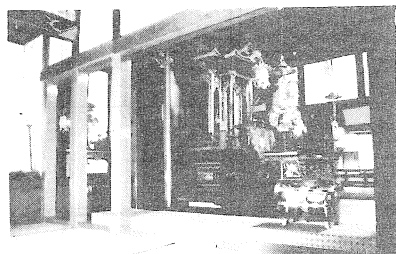


写真6 余間と内陣



写真7 来迎裏と脇仏壇

には墓股を差し込む。斗拱は極彩色、他は黒漆塗り、絵様に金箔置きとする（写真8）。

余間矢来内境は内陣との境より、欄間、長押、地長押とも長押一段分下げ、鴨居に3本溝はあるが建具はなく、御簾を吊り下げる（写真9）。

西飛檐間、後堂、東飛檐間の外廻りは1間毎に柱を立て東西飛檐間の中敷居、2本溝雨戸締り、畳敷き、棹縁天井。後堂は板敷き廊下、棹縁天井、外側は高密雨戸締りである（図1、写真10）。

復原的考察

現在向拝に続く広縁はなく、従って縁端の柱列は向拝下にあり、屋根は瓦に元禄の銘がある通り、当時のもので、本瓦葺きで、型の如く向拝つきで、虹梁の絵様や墓股も当初のものである。

屋根型からも現広縁や飛檐間は後補とわかる（写真12）次に外陣両側の1間幅の室は後補であり、これも除かれる（その内側室の柱外側に風蝕あり、図2）。

外陣手前1間巾は畳がとれて板張となり（畳下板には

使用跡あり）、外陣境には敷鴨居がとりつき、障子仕切りとなる（鴨居は現存）。

矢来内は無くなり、全部一様な扱いとなる。（矢来内を区切る地覆を無理に割り込ませ、畳を前面へ送っている）。

内陣、外陣境は巻障子がなくなり、引違い柳格子となるのであろう（敷鴨居現存）。現在の高肉彫の松、牡丹、波に滝、人物の丸彫欄間はバランスの感じから考えて後補で、恐らくそこには内陣奥の脇仏壇上にある欄間が取りついていたであろう（写真12）。

内陣余間前面の三斗斗拱及び中備墓股も前面を飾るための後補で（前面から片蓋式に造って嵌め込んである）、小壁や柱の彩色も当然なかった。

余間と外陣境は欄間がなくなり、建具は襖程度のもとなるのが至当であろう。

内陣では来迎柱が半間前に出て（床下の足固め大引きに柱の取付きの八角型が残り、現来迎柱がそれだけ後退

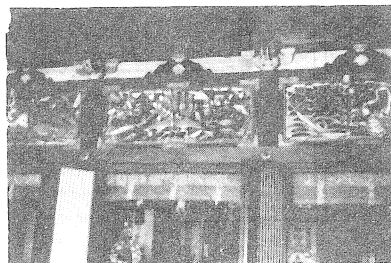


写真8 内陣、矢来内境



写真9 余間、矢来内境

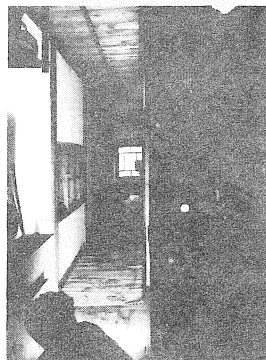


写真10 後 堂

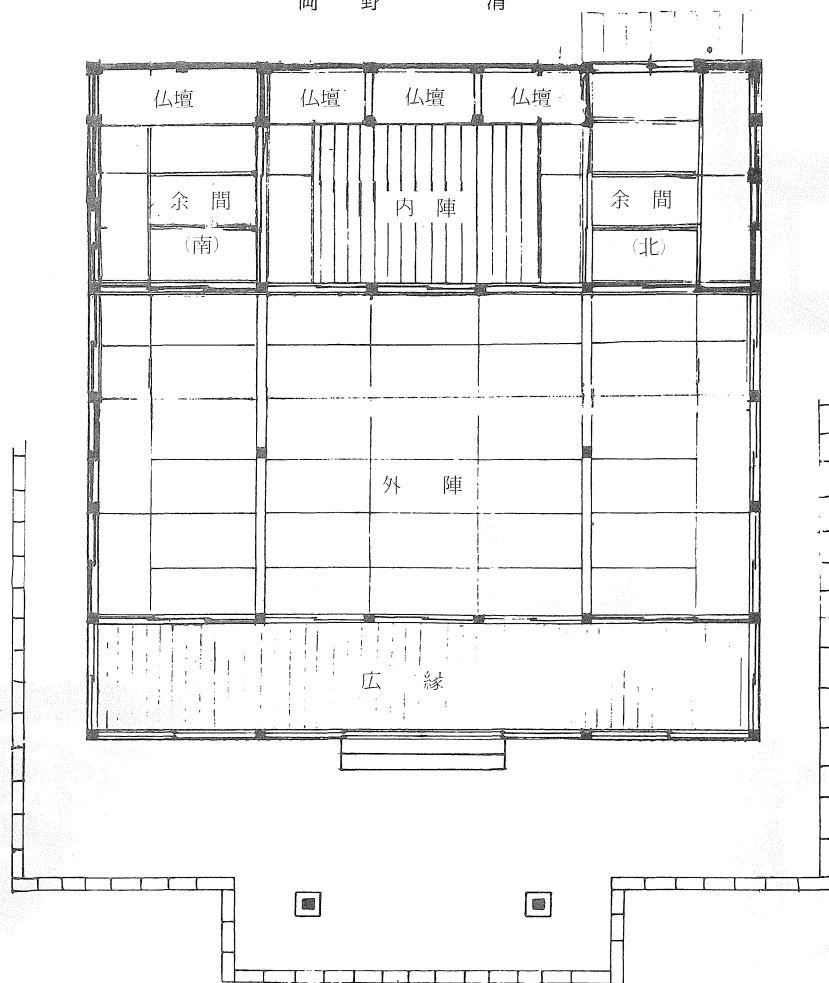


図2 蓮成寺本堂復原平面図

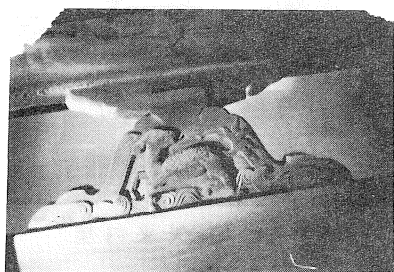


写真11 向拝虹梁上の養股



写真12 脇仏壇上の欄間彫刻



写真13 南西面外観



写真14 西余間仏壇上の虹梁

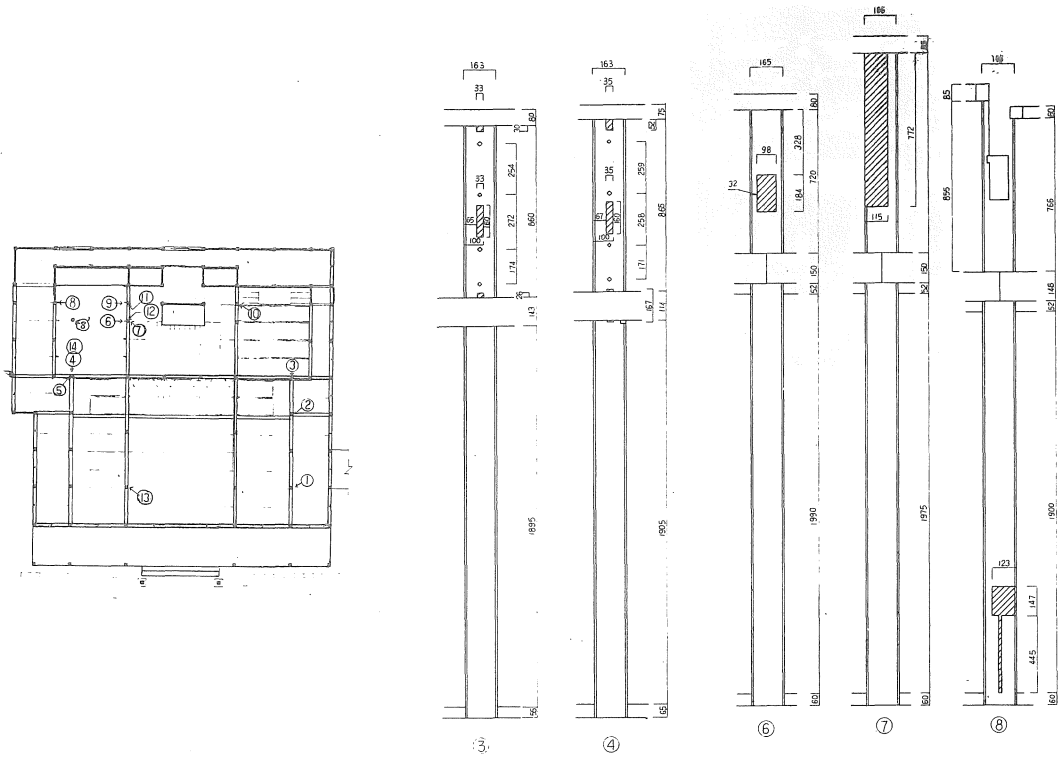
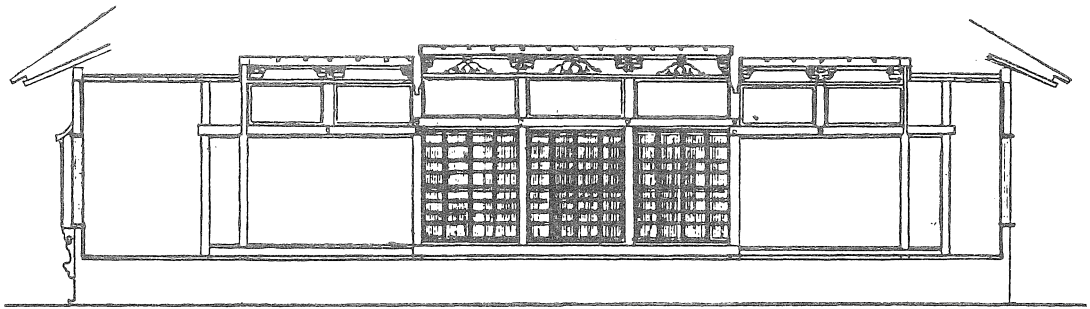


図3 柱に残る痕跡実測図



現状断面図（内陣正面をみる）

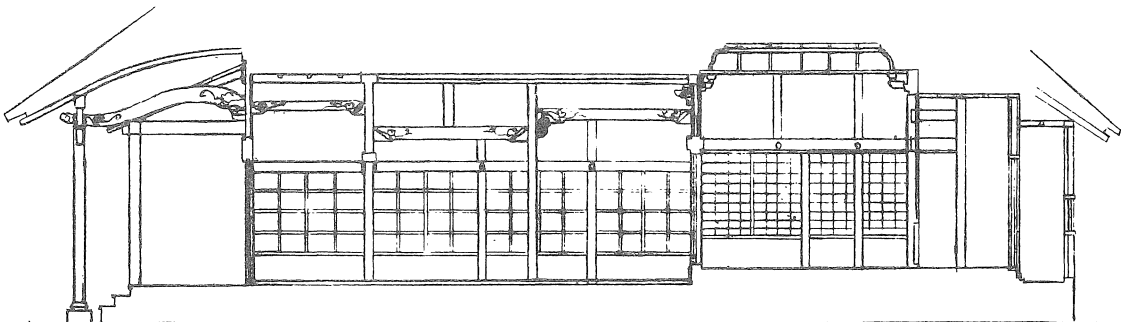


図4 現状断面図向拝一内陣切断面

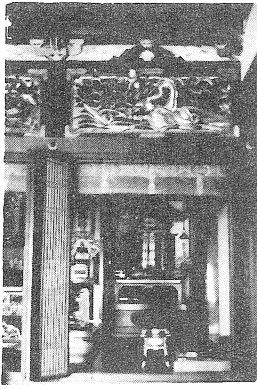


写真15 内陣正面

されていることが分る。来迎柱と西，東両横の内陣余間境の柱に現脇仏壇の前框が1間前進して取付き（その柱と来迎柱に框仕口の埋木が打診される）。それと一直線に並んで両余間の仏壇が前進してくるし，その柱の上部に虹梁とりつき跡，腰高に框とりつき跡があり（図3の8），両余間の見付巾は半間縮まって1間半になるので（床

下に旧亀腹が縮んだ位置にあり，余間飛檐間境の中央柱の礎石跡が存する）西余間（堂は南面）は4.5帖間になり，東余間は6帖間となって仏壇はなくなり（現内陣余間境の柱に仏壇框の跡がなく，仏壇脇柱に出入口痕跡あり），背面へ出る1間の引違戸開口が出来る。現堂の後方1間半までの部分は後堂を含めて全てなくなり（床下の構造が新しくコンクリートの基礎となり，旧位置に亀腹あり，又旧堂の柱外部には風蝕がある），左右前後均整のとれたすっきりした平面となる（図2）。

この寺は復原追求すると天井も内陣を除く他は棹縁となり（内陣は格天井），向拝虹梁，墓股及び内陣，外陣境の旧欄間，外陣柱列間に渡る虹梁の他には絵様や彫刻もなく，来迎廻り斗拱も簡素で，全般によくまとまった道場の形態がうかがい知れる。絵様の様から言っても江戸時代中期以後の崩れた意匠は見受けられないが，西余間仏壇上虹梁や（写真14），内陣脇仏壇格狭間や矢来内境の天井下墓股には幕末の意匠も見られ，漸時仏堂化して来た過程を表わしている（写真15）。

正福寺本堂 岡崎市上佐々木町

真宗大谷派で、この派の布教地としては歴史的にも信仰篤実の地である三河の上佐々木町に真宗三河三ヶ寺の一つである上宮寺を中心として林立する末寺の一つで、上宮寺は永禄年間（1570）の三河一向一揆の拠点ともなった巨刹であり、正福寺はその南に隣接する。

真宗寺院は他宗と比して本堂内部の装飾度が高く、丸彫々刻、金箔おき、黒漆、彩色を虹梁、木鼻、欄間、巻障子等に施すものが普通であって、寺院の格式を有するものは極めて豪華に見せるのが通例である。然し乍ら斯様な現今の華麗な内装も全て創建時から堂宇に付加されていたものではなく、寺院の資格を持つもののみがその規模、格式に応じて漸時進展して来たものである。現存する殆どの寺院本堂では結果的にそれらの規模成りに完成されているので、もともと簡素な堂から成長したものが、当初から完成された型式で創建されたものかを見分けるには復原考察して探り当てることになる。かつては

多数存在していたと思われる寺以前の道場も、そのまま現存しているのは珍らしく、この正福寺も復原すると、その形式が分る例に当たり、真宗寺院の寺院形態としての成長段階を位置づける資料として重要である。

創立と沿革

文明16年（1470）入寂の観喜庵信慶がカリヤスカ村に住んで正福寺（専教坊）を建立し、その他にも多くの道場を建立したが、その後元禄6年（1693）遷化の第6世宝雲が現地へ移して上宮寺に寄付した。

現本堂の建立については寺の過去帳に「第七世宝鈴庵釈智泰、第六世宝雲庵之長男也幼名式部、享保三年五月十三日（1718）飛檐出仕ス、本堂ヲ再建ス、寛延三年（1750）癸午三月七日遷化」とあり、（飛檐出仕すとは本山での僧の格式を示すもの）本堂を建立したことが記されており、様式上からみてもこの第7世の就任の元禄6年（1693）から遷化の寛延3年（1750）の間には該当する（註1）。

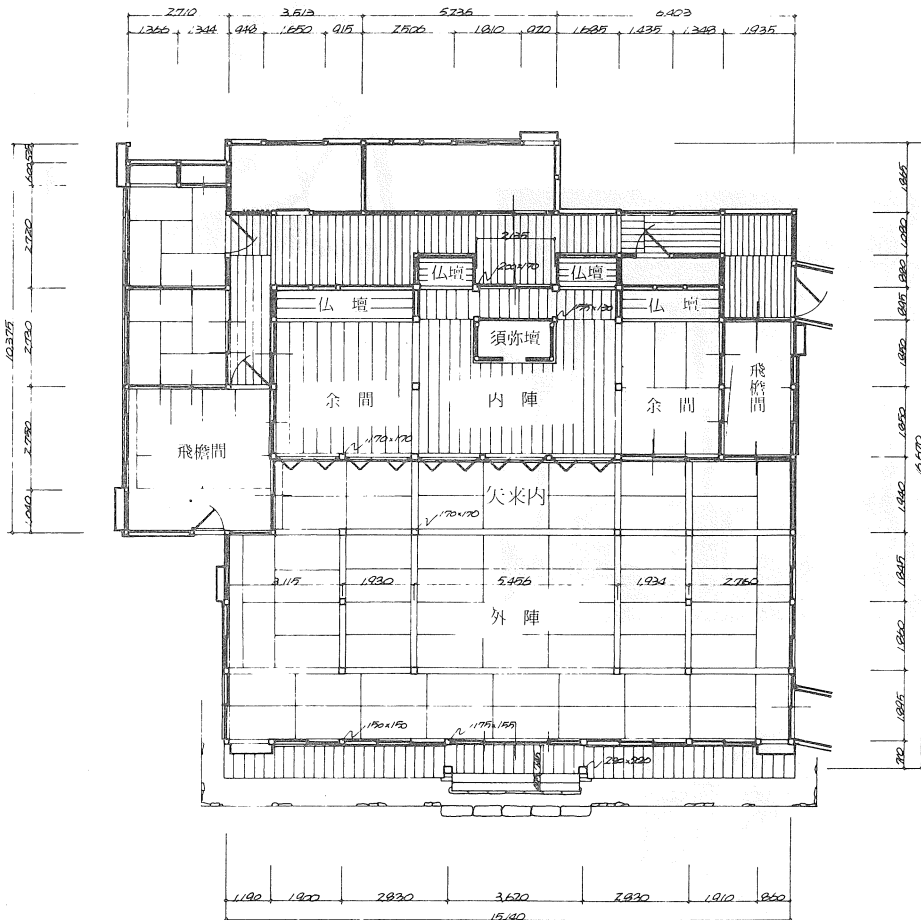


図1 正福寺本堂現状平面図

尚、過去帳によるとその後、「明治15年本堂ヲ修□シ、方8間ト為旧五間半」と記してあって第13世、香雪院釈文成が大拡張をしたことがわかるが、現物復原によってもこの点は証明出来る。

規模構造

この本堂は、現状平面図から見ると南側面及び西背面に多くの室が付加されて複雑な構えをしているが、基本的には極めて簡素な小堂に増築を重ねたもので、中核からその経緯を追ってみれば割合すっきりしてくる。現状は図1の通り、内外陣、余間、北飛檐、広縁、後堂と一通りのセットで、間口実長8間半、奥行8間となり、内陣は間口3間に奥行2間半で、その背面の中1間は引違戸で後堂へ抜け、両脇の各1間は更に半間奥へ入り込んでいる。内陣床の後端より半間前中央の1間半強の間隔で角柱几帳面取の来迎柱を立て、その前に唐様須弥壇をおき、宮殿のをせる(写真2)。来迎柱上部粽付で柱間には頭貫を渡し、両端を突出して渦入木鼻とし、頭貫には袖切、眉、渦、若葉を施して虹梁様に加工する。更に余間仏壇前面の柱から来迎頭貫の下に背違いに同様虹梁をつけている(写真1)。来迎頭貫上及び余間境から内陣見返りまでの内陣内側は、側面及び見返りに内法長押をめぐらし、釘隠しを打ち、両余間境内法長押上は小壁とし、角柱上部に粽を付け、頭貫上に台輪をめぐらし、

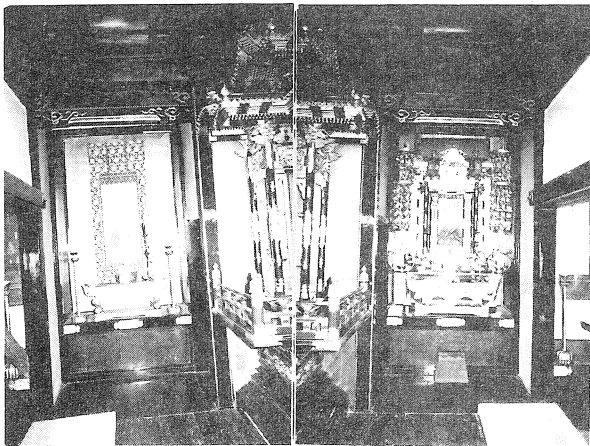


写真1 内陣脇仏壇

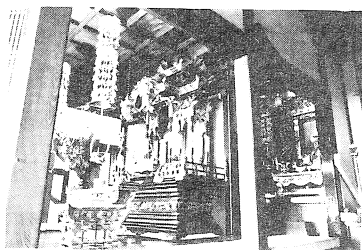


写真2 内陣空殿と須弥壇

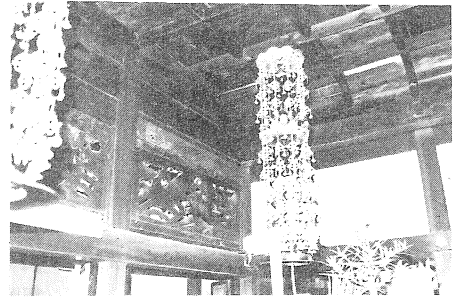


写真3 内陣見返し

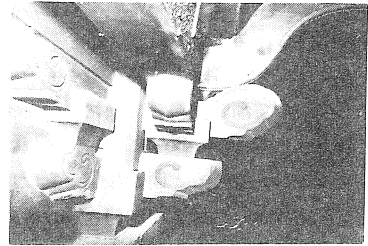


写真4 内陣柱上斗拱

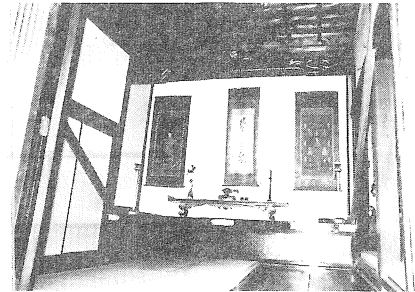


写真5 南余間

その上の天井下までを板壁とし、柱の台輪上部分に大斗と渦を操り出した花肘木をつけ、前方にも花肘木を出して出三斗風にして実肘木で出桁を支え、折上格天井を張る(写真3、4)。

両余間は奥行2間で中1間に柱を立て、背面には深さ半間の仏壇を設ける(図1)。仏壇上には、黒漆塗りに絵様を金箔置きした虹梁を設け、その上の中備に、南余間では墓股、北余間では間斗束をおく(写真5、6)。床は内陣より敷居、蹴込板1枚分だけ下り、南余間は置畳、北余間は畳敷きで、内法に長押を廻わし、漆喰の小壁、棹縁天井とする(写真5、6)。矢来内との境は南余間では2間の中間に柱を立てて双折巻障子を吊って仕切り、北余間だけは旧態を未だ残して3本敷居の柳障子入りのまま使用している(写真7)。

飛檐間は北は1間、南余間は矢来内をとりこみ8帖強とし、その後4帖半2間と廊下を取り、後堂に連がる変形したもので、後堂の後に物置を付加している(図1)

外陣は内陣、余間北飛檐の間の見付の1間幅を矢来内とし、前面中央3間のスパン間に虹梁を一段高く架け、



写真6 北余間

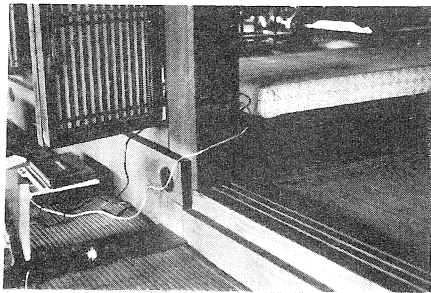


写真7 内陣, 北余間と矢来内の境

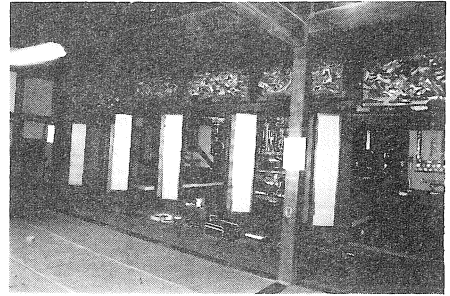


写真8 外陣から内陣を見る

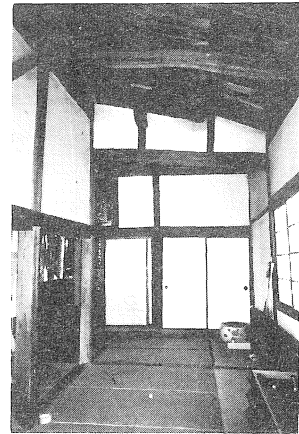


写真9 外陣北側面

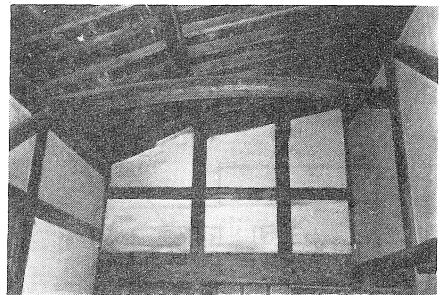


写真10 外陣南側面

その両脇各1間には背違いに下げた虹梁を連ねて架け（写真8）、中央間両脇柱から梁行には広縁境まで虹梁をかけ、その虹梁と平行した両外側各1間の通りは内法長押を廻らし、敷鴨居を付け、鴨居上は天井下まで小壁とし、天井は棹縁天井とする（写真8、図4）。

外陣の内、北側の巾1間半通り（写真9）と、南側面巾1間半強通り（写真10）は、後に屋根を延長して室としたところである（図1）。

現在は外陣に取り込まれているが、東側に面する巾1間の畳敷きの場所は、後補の屋根下の広縁を壁、建具で区切ったもので（写真11）、向拝の繋ぎ梁、垂木がそのまま使われている。

正面戸締は中央2間は3本溝で戸4、障子2であるが、両側と残りの正面は中敷居にガラス戸を引違いとし、雨戸をつける。こゝは旧位置より1間前に張り出したもので、その外に半間のヌレ縁を付け、向拝柱は旧位置のまゝ使用している（写真12）。

復原的考察

享保3年(1718)に本堂を再建したと見られるが、明治15年(1882)に大増築するまでにもう一度改造した跡がある（年次不明）。建立当初の柱も屋根もよく原形を留めていて、それを四方に延長したもので、全形はバラ

スを欠くが、旧態をよく追求出来る（写真12）。

内陣では現在の来迎柱（角柱）の両側外面に仏壇櫃と地覆の取付痕跡があり（図3）、元は南北余間の（堂は東面）仏壇前面と線を揃えて一直線に内陣仏壇を連ね、後門は無く、従って来迎壁、須弥壇もなかった。

南余間は現在見付2間であるが、天井裏に南外側の中央の現在の柱位置より半間内に元の柱上部が小屋梁に付いたまゝ切り残されており、元は南余間も北余間同様見付1間半だったことがわかる。

北余間では見付けは元と同様であるが背面には現在の仏壇はなく、北から1間は床の間で、南半間は背面へ抜ける通路であった（床柱の位置の床下に皮つき丸太の柱の下部が残っており、後補の虹梁は南余間とは絵様も異

なる写真5, 6, 註2)。

矢来内の両脇は南余間の外側まであったが(風蝕差と敷鴨居の痕跡), 現在は後の増築によって全て室内に取

り込まれている(図2)。

矢来外の外陣は現在の柱がそのまま存在して, 中央間見付3間, 両脇は各1間で終り, 正面中央間, 矢来内両端

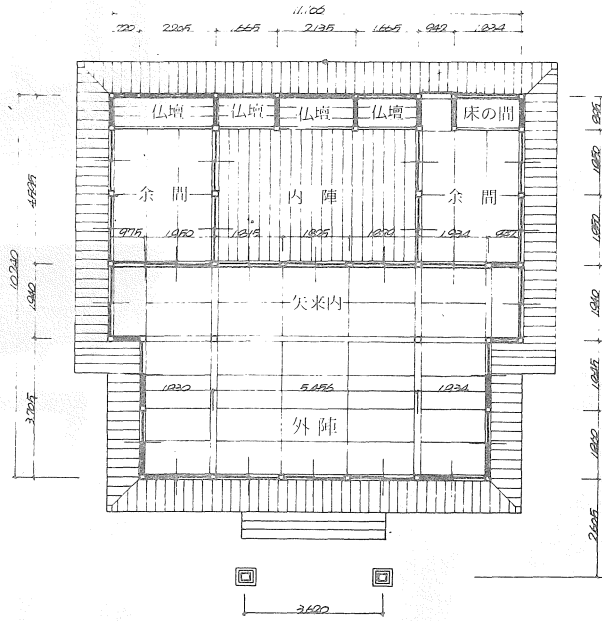


図2 正福寺本堂復原平面図

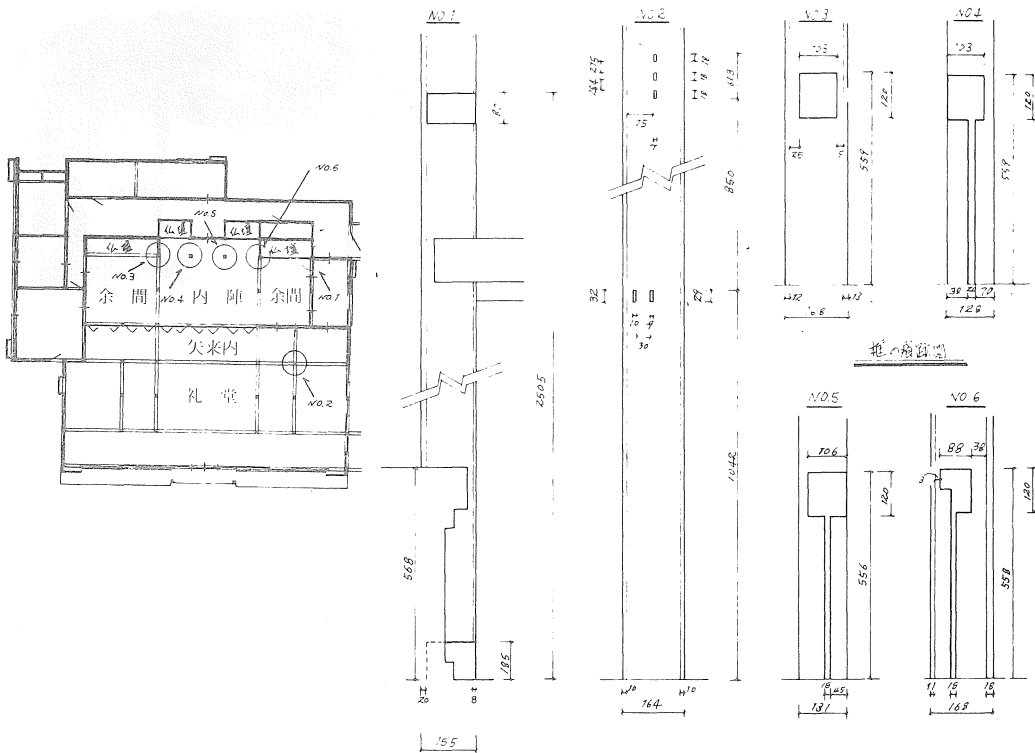


図3 内陣仏壇付近の柱及外陣柱に残る痕跡

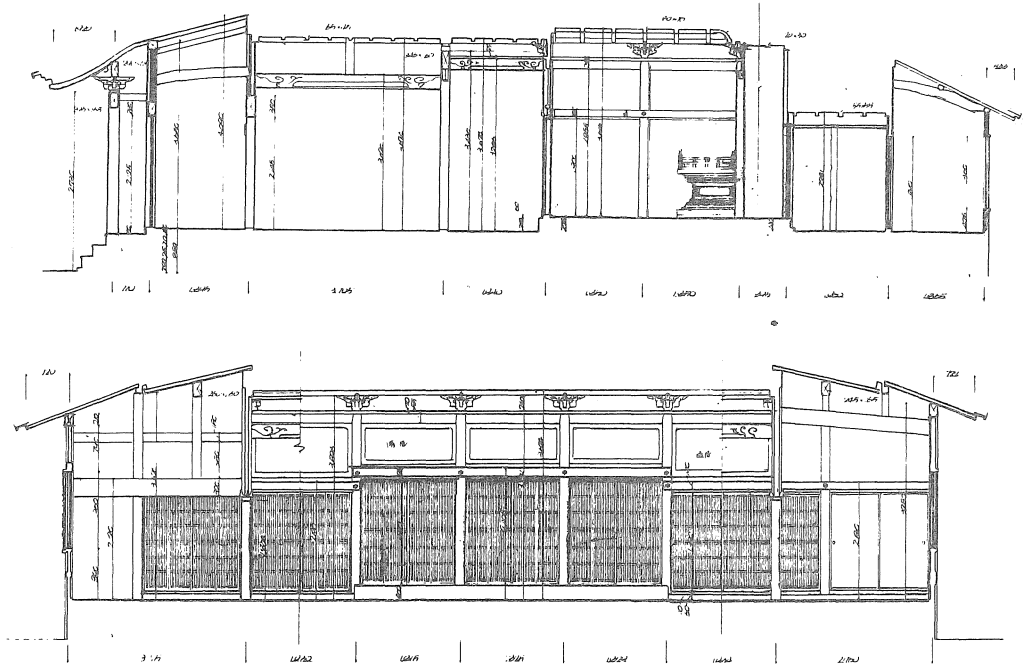


図4 正福寺本堂現状断面図

を除いて各柱間は戸2，障子1の3本溝敷鴨居で戸締りされていた。矢来内両端は戸2の2本溝戸締りで，外を縁側が廻っていた（図2）。

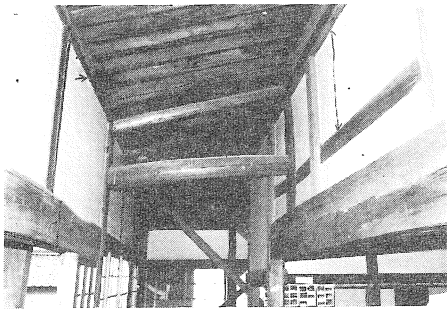


写真11 広縁部分



写真12 東正面

次に現在の外陣正面に3間にわたる大虹梁が架けてあるが，絵様の様式が明治のものとは異なるので，それ以前に中2本の柱を切り取り大梁で担ったものと思われる（写真11）。旧柱は小壁間に残っている。現在，虹梁には前面と下面に板が打ってあるので詳細はわからないが，柱側面に方立を打付けた痕跡がないし，下面には溝の一部がのぞかれるので，3本溝又は2本溝の戸締りであったであろう。

向拝はもともとあったものであるが，明治期に広縁に当たる部分を増築したので，向拝部分を屋内に取り込まれ，今は向拝柱付近がわずかに出ているに過ぎない（写真11，図1）。もとは外陣外柱から1.5間程出て向拝柱が立ち，登階段，廻縁，繫虹梁（現存）をもった正規な型式を備えていた（図2）。

又内陣の正面と矢来内境の上部高肉彫金箔置き欄間も意匠上のバランスから当初のものかどうか疑われ，双折巻障子は引違格子，余間との境は建具は襖程度のものか。又余間前の欄間は壁であった痕跡がある。

柱は全て面取角柱であり，欄間彫刻の上には頭貫，台輪を廻らし，実肘木に雲型を彫り込み，木鼻つき出三斗を柱に差し込んで飾っている（写真8）。

以上のように復原し乍ら追求すると創建時は今日に見る真宗寺院の常態とは可成り違ったイメージとなり，簡素な道場型式の建物であったことが分る。かかる小規模な寺院で江戸時代中期以前のものは殆ど数少なく，事実

を拳証することが困難であったが、ここに2つの事例をもってこの種の分野を解明する1つの拠所を得ることが出来た訳である。

結 び

蓮成寺本堂は17世紀後半頃、正福寺本堂は18世紀前半の建立と見られ、共に絵様つき虹梁の使用が活発で、更に後者では内外梁に斗拱の使用も見られるが、それにもかゝらず、間取を復原すると、内陣の奥行が浅くなって、来迎壁を設けず、内陣背面に一直線仏壇が通り、北余間には仏壇もなくなって、客間となるなど、古式な平面であったことが知られたのは注目に値する。

註1 正福寺過去帳

開在歎喜庵信慶

如光法師遷化ノ後 尾州カリヤスカ村ニ住シテ正福寺ヲ創建ス、其他多ク道場ヲ立、尾州十八ヶ衆勢州七ヶ衆処々転居ス、後遷リ佐々木邸ニ居住ス、当山ノ開基ナリ
文明十六年九月九日寂ス、

第四世寶香菴釈修伝

第三世為物菴之長男ナリ得藏坊又専称坊ト号ス
天正六年正月六日遷化

第六世 宝雲菴釈修学又各修泰

(第五世寛文十三年九月十八日逝ス)

第五世寶楽菴之長男也 尾州ノ正福寺ヲ此地ニ移シ尾州所在ノ末寺ヲ上宮寺ニ寄付シ専教坊ヲ改メテ正福寺ト号ス
元禄六百年八月十五日遷化

普請世話方

当 所	大工棟梁	高須善吉	高須周古
		高須曾七	高須枿藏
東牧内村		安藤彦六	中根四方吉
下佐々木村		都築枿右エ門	大沼喜兵衛
		石川枿藏	
瓦則	古井村	苗字常吉	
車力	当 所	太田友右エ門	
左官	当 所	大芦小島禅蔵山岡利吉	

第七世宝鈴菴釈智泰

第六世宝庵之長男也 幼名式部享保三年五月十三日
飛檐出仕ス 本堂ヲ再建ス
寛延三年癸午三月七日遷化

第十三世香雪院釈文成

明治十五年本堂を修□シ方八間ト為旧五間半
これについて北余間仏壇上虹梁裏に次の墨書がある

註2

明治十二年卯八月当山拾代目住職山田文成廿八年
弟子小島速成十三年

大工棟梁	岡崎能見町	カンテキ	廣齋兼藏
棟梁脇	同町	朝 起	小原治作
		大 黒	太田初藏
弟子	酒 吞	広瀬常吉	同大食広瀬重吉
同	御家堀	広瀬久吉	同オコリ虫広瀬健次郎
同	ウツソリ	広瀬仁吉郎	